

農業経営基盤強化促進法第18条第1項の規定に基づき、公表します。

小矢部市長 桜井 森夫

市町村名 (市町村コード)	小矢部市 (162094)
地域名 (地域内農業集落名)	若林地区 (金屋本江、西中、下中、水牧)
協議の結果を取りまとめた年月日	令和6年2月28日 (第1回)

注1:「地域名」欄には、協議の場が設けられた区域を記載し、農林業センサスの農業集落名を記載してください。

注2:「協議の結果を取りまとめた年月日」欄には、取りまとめが行われた協議の回数を記載してください。

1 地域における農業の将来の在り方

(1) 地域農業の現状及び課題

・65才以上の農業者のうち後継者不在の農地面積が、西中集落で1.91ha、下中集落で2.55ha、水牧集落で2.04haの合計6.50haあるが、今後農業を担う者が引き受ける意向のある農地面積が12.81haとなっており、当面の間は区域内の耕作者で農地の耕作を維持できる見込である。

・集落営農組織では構成員の高齢化が進んでおり、新たな農業従事者の確保が必要である。

・法人ではない個人農業者では、福利厚生などの問題から、公共による新規の求人募集を行うことができなかった。

・定年延長制度の変更(60才から65才に延長)により、新たな農業従事者の確保が難しい状況である。

・繁忙期に作業に来てくれる40代の季節補助員に農作業を教えることで、農業技術力の向上と熟練化を図り、集落営農組織の活動継続を実現していきたい。

・集落営農組織において、現状では解散の意向はないが、営農が立ち行かなくなれば集落組織同士の合併を模索していきたい。

(2) 地域における農業の将来の在り方

・農地は概ね担い手の下に集積されつつあることから、今後は、将来の担い手の育成・確保や、集落営農組織の合併を模索するなど、より持続性の高い農業経営の実現を目指す。

・米・麦・大豆等の主要な作物以外に、加工用キャベツ等の転作作物の生産に取り組む。

2 農業上の利用が行われる農用地等の区域

(1) 地域の概要

区域内の農用地等面積	305.98 ha
うち農業上の利用が行われる農用地等の区域の農用地等面積	305.98 ha
(うち保全・管理等が行われる区域の農用地等面積)【任意記載事項】	ha

(2) 農業上の利用が行われる農用地等の区域の考え方(範囲は、別添地図のとおり)

農振農用地区域内の農地及びその周辺の農地を農業上の利用が行われる区域とする。

注:区域内の農用地等面積は、農業委員会の農地台帳等の面積に基づき記載してください。

3 農業の将来の在り方に向けた農用地の効率的かつ総合的な利用を図るために必要な事項

(1)農用地の集積、集約化の方針
・地域内の農業を担う者への経営農地の更なる集約化を目指し、農地所有者は出し手・受け手にかかわらず、原則として、農地を農地中間管理機構に貸し付けていく。
(2)農地中間管理機構の活用方針
・農業を担う者が経営難等の事情で営農の継続が困難になった場合には、地域計画の見直しを行い、農地の一時保全管理や新たな受け手への付け替えを進めることができるよう、機構を通じて農業を担う者への貸付けを進めていく。
(3)基盤整備事業への取組方針
・農業の生産効率の向上等を図るため、農業者の要望を踏まえて、費用に見合った用排水路等の基盤整備に取り組む。
(4)多様な経営体の確保・育成の取組方針
・認定農業者や新規就農者の確保に努め、市・県・JAと相談体制を確立し、農地の斡旋、技術的指導や法人の合併などの支援を行っていく。
(5)農業協同組合等の農業支援サービス事業者等への農作業委託の活用方針
・地域内で農作業の効率化を図るため、防除作業が困難である農業者についてはいなば農業協同組合に委託し、農作業省力化の支援を行う。

以下任意記載事項(地域の実情に応じて、必要な事項を選択し、取組方針を記載してください)

☐ ①鳥獣被害防止対策	☒ ②有機・減農薬・減肥料	☒ ③スマート農業	☐ ④畑地化・輸出等	☐ ⑤果樹等
☐ ⑥燃料・資源作物等	☐ ⑦保全・管理等	☒ ⑧農業用施設	☒ ⑨耕畜連携等	☐ ⑩その他

【選択した上記の取組方針】

②有機・減農薬・減肥料について、地区内の一部地域では有機や特別栽培による水稻の作付を行っている。今後も地域の実情に応じて、有機及び特別栽培農産物の作付に取り組んでいく。

③スマート農業について、ドローンによる薬剤散布や自動操舵システム付きの田植機などの活用をはじめ、費用対効果を踏まえながら導入を検討し、農業従事者が不足する状況下でも効率的に作業ができるよう取り組んでいく。

⑧農業用施設について、集落営農法人単位で導入してきた育苗施設を今後も活用し、低コストで効率的な作業が継続できるよう取り組んでいく。

⑨耕畜連携等について、耕種農家が栽培した飼料用米を市内畜産農家へ供給し、その作物を餌として食べた家畜の排せつ物を圃場に散布して農作物を収穫を行う循環型農業に取り組んでいく。